

社寺建築  
設計監督 及臺灣檜材の安價提供

(三年以上水善乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候  
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候  
(充分なる水善乾燥をなしたる檜材最も優真なるも水善不  
充分なる檜材は于制狂び等の缺點多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六大大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整然木
- 六、木高種色

目 次

聖訓摘要	本多日生
教観不離	本多日生
現代宗教家に望む	海軍中將 佐藤鐵太郎
聖徳太子と法華經	森川日修
婦人と社會事業	入野契則
各地通信報導	編輯局

第三十三年八月號



不許複製

大正十五年 六月三十日印刷 納本行(第三百七十六號)  
大正十五年 七月一日發行

統一廣告料	
表紙	一頁 貳拾圓
一頁	拾圓
中頁	九圓
四分一頁	五圓

統一定價	
一冊	金貳拾錢
半冊	金壹圓貳拾錢
一ヶ月	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
送料共	送料共
送料共	送料共

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

編輯人 國友日斌

印刷人 鈴木日雄

印刷所 名古屋市東區千種町字五反田五二番地

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 統一發行所

名古屋市東區田代町字城山七十七番地

編輯所 統一編輯局

電長東五〇八七番 名古屋一〇八一九番

# 教

## 第七號

### その目次

一、御製數首	本多日生
一、理想の文化と佛教	後藤新平
一、政治の倫理化	床次竹二郎
一、信念と第二維新	永井米藏
一、労働問題の解釋	モリス・ワリス氏 岩野直英譯
一、社會主義評論	桃源遺事
一、義公逸事	高島平三郎
一、教養逸話	立正大師
一、聖語數節	志賀重昂
一、世界當代地理	本多日生
一、東洋思想の大共通點	

以上

## 蓄音機 ドコロ

大僧正本多日生師吹込

- 一、宗教信仰の必要
- 一、佛教信仰の歸結
- 一、佛教の卓越せる所以
- 一、聖語

二枚四組二圓四十錢(多二送料三十錢)  
取次所 統一編輯局

### 本多日生親下著小冊子

(現在品のみです賣切れ絶版になつたものは)  
(注文さるいと餘計な手數で困ります)

- 自我 偈 講 義 一部金廿錢送料金貳錢
- 修法勸行の心得 一部金十五錢送料共
- 一切の勝利は人格にあり 一部金十五錢送料共
- 宗教の五綱 一部金十五錢送料共
- 教育勅語と思想問題 一部金拾五錢送料共
- 一部金壹圓送料共
- 一部金貳拾錢送料共
- 一部金壹圓送料共
- 十部金壹圓送料共

名古屋市東區田代町城山 編輯局  
振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引を御願合下さい

## 聖訓摘要

(第四)

大僧正 本多日生

### 大黑天神供養相承事

この御遺文は疑はしい御遺文であつて、別段取出して御紹介する程のこともありません。

### 當世念佛者無間地獄事

これは注意して讀むべき大事な御遺文であります。日蓮聖人が「念佛無間」を主張せられるのは、屢々申した通りに、廣い意味に於て佛を念ずるのは、佛教は三寶に歸依すると申して、如何なる者でも佛に歸依する、隨つて「佛を念ずる」といふことはよいのであるが、日蓮聖人が「念佛無間」と言はれたのは、阿彌陀を念ずる事に依つて他の佛をみな捨てるといふ、狹義な排他的の念佛に就て言はれるのである。それは阿彌陀を念ずることが悪いといふよりは、それが爲めに釋迦如來を捨て、十方の諸佛を捨て、日本に於ては神様をも敬はぬといふ偏狹固陋なる排斥的なる狹義の念佛を攻撃したるものであります。それ故にその意味合ひを明かにするには、この「當世念佛者無間地獄事」といふ御遺文を精讀すべきである。當世法然等が唱へて居る馬車馬式の念佛、唯だ阿彌陀如來より他にいかんといふ念佛の意味を明らかにする必要がある。それは屢々申したことであるが、「雜行雜修を振り捨て、唯ひたすらに」と蓮如あたりが「改悔文」

で言うて居る意味合ひを知らない、日蓮聖人の方が争ひを好んで攻撃するかと思ふけれども、決してさうではない、彼等が一向宗と言つたり浄土宗と言つたりする事が、狭い意味を言うて居るのである、浄土宗といふのは娑婆の修行を否定し、何でも浄土の門の中に飛込んで、唯だ阿彌陀如來の所に駆け込めといふのである。さうして他のものは一切自力宗である、難行道であると言つて、吾々が娑婆世界に於て奮闘して善を積み徳を行ふ努力を否定して、そんな事はどうでも宜い、純他力で唯ひたすらに阿彌陀様に歸つて行けといふ、全く狭劣な意味を以て立つて居るのである。宗教は神佛の力に頼るけれども、それと同時に省みて己れに奮闘努力する精神がなければならぬ、殊に大乘佛教の精神はそこにあるのである。

そこでこの一向宗と言ひ、浄土宗といふものの根本の主張を明かにして置かなければならぬ、それには五種の正行、雜行といふので、それは讀誦、禮拜、讚歎、稱名、觀察といふ五つに就て、それ／＼に正行と雜行とを論ずるのである。その正行といふのは阿彌陀如來に限るのである、即ち讀誦するには阿彌陀如來の有難い事を書いてある淨土の三部經を讀むのが讀誦正行だ、それより他のお經を讀んだら皆讀誦雜行だから讀むことはならぬといふ。阿彌陀様を禮拜するのは宜いけれども、他の神や佛を禮拜するのは禮拜雜行だから一切拜んではならぬといふ。讚歎といつて「阿彌陀様が有難い」と言つて讚めるのは宜いけれども、「お釋迦様が有難い」と言つて讚めたら、それは讚歎雜行になる、他のものは讚めてはいかんといふ。稱名といふのは「南無阿彌陀佛」と稱へるのは宜いけれども、他の「南無釋迦牟尼佛」とか「南無妙法蓮華經」とか唱へることはいかんといふ。觀察といふのは心で考へる事で、阿彌陀如來の功德、阿彌陀如來の世界の功德を觀察するのは宜いけれども、他の佛や神の有難い意味を考へてはならぬといふ。斯う

いふやうな主張は心を專注するには宜いやうであるけれども、非常に氣の狭いことになるのであつて、嫉妬の神といふやうな事になるのである、阿彌陀様のみを有難いと考へるのは功德になるけれども、他の佛や神様が有難いと考へてはならぬといふ、非常に氣の狭いことを言つたものである。それが原則に成つてズツと來て居るのであるが、それをモウ一つ極點に行つたのが、所謂眞宗である、「雜行雜修を振り捨て唯ひたすらにナンマイダーナンマイダー」とやつて來たのである。さうして「念佛往生」と「所行往生」といふ事を立てるのであつて、阿彌陀様に依つての往生だけは認めるけれども、諸行といふ他の善根功德に依つての往生を否定する所の宗旨を建てたのが一向宗といふのである。他に如何なる善い事をして、それは皆役に立たぬといふ。所が日蓮聖人に攻撃されてから、専修と諸行とがグラ／＼して來て居る、堅い念佛者になると「諸行はいかん、雜行雜修を振り捨て」といふ、その使ひ分は始終マゴ／＼して居る。それは今日の淨土宗などでも、例へばこの間増上寺に於て天照大神の御札を迎へて來て遙拜式をやつたりするのは、即ち諸行の方を少し取入れたのである。併し本當に云へばそんな事もやめる方が宜い譯だから、又以前に戻つてやめたりする、併し又やめては工合が悪いといふので、開いて行きかける、又あと戻りをする、さういふ事を始終やつて居る。基督教でも唯一神教であるから、強いて日本の國に合さうとやつて居るが、又いけなくなつて以前に戻る、始終行つたり戻つたりして、結局は進む事が出來ない。一向宗は單一神教としてさういふ狹隘な頭腦に居るし、基督教は唯一神教としてやはり狹隘な頭腦に居るものである、それ故に己れの宗旨でいふ神なり佛なり、それ以外のものを禮拜し信仰することを絶對

に禁ずる所の宗教となるのである。それを日蓮聖人が攻撃されたので、當時そんな事はモウ知れきつて居る、言はいでも判つて居る話であつたのである。法然の作つた『選擇集』はその事ばかり書いた物で、何もかも捨て、終へといふ狹隘な意義である、それが爲めに版木も取上げられて叡山で焼かれるし、法然は死んでから墓を發かれて加茂川に墮され、親鸞もその罪に坐して越後に流されたので、その事實は丁度日蓮聖人が四箇格言に依つて法難を受けたと同じ事で、それを除つてしまつては淨土宗も眞宗も無い、一向宗と言つたら難行難修を振り捨て、といふことは譯でも知つて居ることぢやないか。そんな事は一々聞く迄もない、今日は餘り物が判らなくなつて居るから、日蓮聖人の言ふ事が酷いといふけれども、向ふが非常に酷いことをやつたものである。その事は前にも申した禪宗の無住禪師の書いて居る『砂石集』などを見れば最もよく判るので、非常な頑固な事を言つてお釋迦様を玩弄物にしたり、法華經を壁に貼るといふやうな亂暴をやり居つたから、日蓮聖人が出て念佛無間の鐵槌を下したのである。その前後の關係を知るが肝要である、日蓮聖人が風なきに波を起した譯ではない。今でもやはり彼等は内證でいふ時にはひどい事を言ふのである、公開演説などでは言はんけれども、爺さん婆さんを集めて安心門を説く時になれば、やはりその事を言ふのである。

そこで日蓮聖人が茲に書かれて居る事は、  
 問うて曰く、當世の念佛者無間地獄といふ事其の故如何、答へて云く、法然の選擇に就て云ふなり。

(遺文卷五〇五)

當世の念佛者が地獄に行くと言はれるのはどういふ譯ですかと問うたその答が洵に簡單明瞭である、法

然上人の作つた『選擇集』といふ書物がある、これに依つて淨土宗を立てた、その『選擇集』が無間地獄の本だといふのである。その中に書いてある事が唯今申した正行難行の説明に依つて一切他のものを排斥して居るから、それで言ふ譯である、茲に『選擇集』の事をズツと詳しく書いてあります。それから進んで、

誠に淨土の三部經等が一代超過の經ならば、五十年の諸經を嫌ふも其の謂れこれ有りなん、三部經の文より事起つて一代を攝すべしとは見えす、但一機一縁の小事なり、何ぞ一代を攝して之を嫌はん、三師茲に法然此の義を辨へずして諸行の中に法華涅槃並に一代を攝して末代に於て之を行せん者は千中無一と定むるは、近くは依經に背き遠きは佛意に違ふ者なり。(遺文卷)

元來淨土宗の用ゆる三部經、即ち觀經、雙觀經、阿彌陀經といふ三つのお經が、「一切超過の經」といつて釋尊の一代に説かれた總てのお經の中に勝れて居るお經であるならば、他の一切經に對して、淨土の三部經から見ても他のお經を斥けるといふことも未だしもであるけれども、三部經といふお經はそんな善いお經ではありはしない、三部經などから一切經を彼是れいふやうな資格のあるべきものではない、茲にも「但一機一縁の小事なり」と言はれて居る、これが大事な點である。このお經が誰の爲めに説かれたものかといふことを考へなければならぬ、法華經の如きは總ての者を皆集めて堂々と説いたお經である、阿彌陀經のやうなお經は一機一縁といつて、座敷牢に入れられて居る一婦人の爲めに説いた小さい出來事である。阿闍世太子といふのが惡逆なる者で、父頻婆娑羅王を殺し、母の韋提希夫人を座敷牢に入れて食を斷つて殺してしまはふとして居る時、その韋提希夫人を憐れんで釋迦如來が神通力を以て、その座敷牢に居る一

婦人の爲めに愚めの説教をしたといふ事になつて居る。これは他の力を以て救ひ出すことの出来ない状態に居るので、阿闍世太子が自ら宣して王となつて母を虐めて居り、國王の力を以て母を虐待するのであるから、他の人の力に依つて之を救ひ出すことは出来ない、それ故に牢の中で死んで行く者である、眞に悲嘆に沈んで居る。併し人生といふものは牢の外に出ても苦みの多いもので、娑婆は中々辛いものである、どうせあなたは死んで行くのであるが、併し死んで行くその先には阿彌陀様が待つて居つて、あなたを救うて呉れるのであるから何も悲しむことはない、何時呼吸ひき取つても宜しいといふので、あゝいふやうな所謂悲哀な、厭世悲觀の教が出て來た譯ぢや、悲觀の教ではあるけれどもそれに依つて慰めるより外に仕方が無い。例へば此處に死刑の宣告を言渡されて居る重罪犯人があつて、それに教誨する場合に「人間といふものはこんな所に居つてはいかん、どうしても世の中に出て活動をしなければならぬ」と言つた所が、モウ死刑の宣告を受けて明後日は頸を締められるといふので泣いて居る、それを慰める爲めに言つた教誨の言葉を以つて健全なる國民の宗教としたならば、實に暗愚なことではないか、それを日蓮聖人は言ふのである。モウ詳しい説明を俟たぬ、一機一縁の小事なりと言へば、詳しく言ふ必要もない、お経を見ればその通りの來歴から起つて居るのである、それ故に「一機一縁の小事なり」といふ言葉で言ひ現はされて居る。さういふお経を本にして一切經を下に見て、善い悪いのといふ批判を下すべきではないぢやないか。斯く日蓮聖人に依つて論せられたならば、幾ら藻掻いても跳ねても、これは眞理であるが故にどうすることも出来ない、石でも打つて誤魔化すよりほか道がない譯です、今日でもその眞理はやはりその通りのものぢや。

それ故は左様なものに依つて一切經を捌いて、法華經が善い悪いのといふやうなことを言ふのは、全く佛敎を判釋する方法を知らない者である。法華經などは千人修行しても一人で助かる者は無いぞといふが、これは「近くは依經に背き」——依經といふのは彼等の依り所として居る三部經である、その三部經にして見た所で、決して法華經の事を批難しては居らぬので、方便のお經といふものは、後に説くお經の事を言ふものではない、彼等がそれを宗旨として立てるから「法華經がどうだ」といふやうなことを後の人がいふけれども、三部經の中には法華經に就て善いも悪いも言うてあるものではない、方便の教を説くのであるから、其處だけの事を一寸言うてあるだけである。然るに左様なお經に依つて法華經を批難するのは、依經にも背き、遠くは佛の思召に違ふものである、「近くは依經に背き遠くは佛意に違ふ」次第である、自分の依り所にして居るお經の精神にも背いて居るし、進んでは佛様の御本意に違ふものである。併しこの宗旨が徳川時代に蔓り過ぎて、大いに其の累をなして儒者などから攻撃をせられ、又佛敎の今日復活し得ないのも、學校教育から見ても佛敎が厭世的である、悲觀的であると言はれるのは、その大部分の責任は浄土門が負はなければならぬのである。佛敎の中に法然一流の「あゝいふ主張がなかつたならば、決して徳川時代にも佛敎を攻撃することは出来なかつたであらう、今日の教育界からも佛敎を今のやうな見方はしないであつたらう、先づその責任の七分は浄土宗が負はなければならぬ、残る二分は禪宗が負はなければならぬ。この二つの宗旨さへなければ、徳川時代に於ても今日に於ても、佛敎が日本の識者階級から攻撃されるといふことは無い譯である、洵にその罪は大なるものである（内部には信者が澤山あるやうであるけれども、日本の國家的意識として佛敎を認める上に排斥されて居るのは、低級なるものとしては澤

山の信者を有つて居るけれども、相當なる地位を占め知識ある者、即ち國家の表面に働く者から佛教を否定されるのは、淨土門がある爲めである、御維新の初めにも「佛教は人を愚にする」といふ言葉が盛んに流行つた、その佛教は人を馬鹿にするものぢやといふのは淨土門のことである、佛教全体ではない、淨土門があつて佛教を誤り傳へるが故に、佛教は人を愚にするといふ批難を受けたものである。左様にして佛陀の教が日本の所謂知識階級から批難されたこの罪といふものは、法然一流の者が負はなければならぬ、その意味に於て今頃は閻魔法王の前で又新しく問責せられて居る譯ぢや。然るに今尙ほ醒めないで、今日のその流れに居る人はやはり法華宗の惡口などを繰返して居るけれども、それは實に不眞面目なる話である、日本人にして現在の進んだる文明の中に、尙ほ且つ日蓮の主張を嘲り笑つて、鎌倉當年に石を以て酬ひたるが如き態度を繼續することは、許すべからざる次第である。

それからこの文章の終の所に、

法然に於ては純圓の機、純圓の教、純圓の國を知らず、權大乘の一分たる觀經等の念佛、權實をも辨へざる震旦の三師の釋、之を以て此の國に流布せしめ、實機に權法を授け、純圓の國を權教の國と成し、醍醐を嘗むる者に齋味を與ふる其失誠に甚だ多し。(遺文錄)

といふのがこの結論になつて居る、これは實に動かん論旨である。この日本の國の人には「純圓の機」と言つて、佛教の中に於ても最も純粹なる圓滿なる一番善き教を信すべき國民である、又「純圓の教」が盛んであるべき國である、これは聖德太子が最初佛教を採用せられた時に於て見定められた所から、又日本國體の上から見るも、國民性から見ると、實にア、いふ厭世悲觀のものは國民性と一致しないもので

ある。何故あんなものが蔓つたか、全体あの聲からして日本人には合はん、ナンマイダー、ナンマイダーといふあの滅入るやうな聲は、日本人は大嫌ひな性格ぢや、どうしてあんなものが日本に盛んになつたか不思議の至りである、それは日本が一時非常な戦亂の爲めに、所謂保元、平治等の公亂を受けて、夫は殺され子供は殺されるといふやうな譯で、國民みな悲哀に沈んだる時に起つたものである、或は平家が滅び或は源家が亡びるといふやうな滅亡の有様を見て、人生無常を感じて山の中に入つて念佛でも唱へて、親の葬ひをして夫の葬ひをして居るといふには宜いけれども、今日のこの物興する旭日昇天の日本の一般國民の教としては、あゝいふ哀れな夢は合はぬ譯である。佛教といふものは何だか消極的悲觀厭世のものぢやといふのは、その内容の議論より、あの聲が大いに關係がある、あの聲を聞いただけで佛教の事を知らし者はさう考へてしまふのである、それを日蓮聖人が言ふのである。日本は純圓の國で、同じ佛教と言つても立派な菩薩行を盛んにして、この佛の教に依つて偉大なる精神を養つて、奮闘的生活をなし、堂々として進んで行くべき國ではないか、それを法然が權大乘教といつて、同じ大乘の中でも方便の觀經などに依つて支那の坊主——一向日本の事などを知らん曇鸞、道綽、善導といふやうな悲觀的な男、支那には能くあゝいふ者が出る、今でもあんな風な國であるから、悲觀厭世も無理からぬ、又道を談ずると言つても竹林の七賢など言つて、世捨人みたやうに、世の中をふてくさつたやうな者が出て来る、だから曇鸞などは「あゝこの世の中などはどうでも宜い」といふやうなことを言つて居る、それはあの通りに何時も國內が混沌な状態を續けて居れば、そんな中に力を入れても仕方が無いから「現世はどうか斯うか食つて行きさへすれば宜い、後世は阿彌陀様の世界へといふやうなことになるのも無理からぬ事である。支那に

生れたならばさういふ気分も起るけれども、日本はさうではない、秩序整然として建國以來次第々々に發展を續けて、今尙ほ前途多大なる天職を有して居る國家である、この儘竹藪の中に逃げ込んでナンマイダ一などと云つて居るべき國家ではない。「念佛の權實をも辨へざる震旦の三師」權實を辨へない曇鸞、道綽、善導などの説を、この日本の國に弘めたといふことは非常な間違ひである。善導なども終ひには厭世的に樹の上に登つて自殺をしたといふ、宗教の先輩が樹の上で首を絞つて死んだといふやうな、そんな事は逆も日本人には合はぬ譯である。左様なものをこの國に弘めるのは、眞實の機根に方便の教を興へ、純圓の國に方便の教を布くもので、酩酊の法味を嘗むる者に齋味を興へる譯で、尙に不都合な事である。錦の布團の上に坐らせなければならぬ者を、胡蘆の上に坐らすといふか、日本の國民を遇するに方便の教、悲觀厭世の教を以てするといふ事は、國民の天分から考へて許すべからざることぢやと日蓮は論じたのである。これに今尙ほ生きて居る大事な問題である、今後日本人が宗教を新しく撰ぶに就ては、このやうな悲觀厭世の教ではいかん、何處までも積極的の信仰を本にして、大いに活動を促して行く宗教でなければならぬ、それが日蓮のやり方である。これはモウ判りきつたことで、法然や親鸞のやうな行き方をするのが、日本の前途の爲めに善いか、日蓮のやうに立正安國の主義に依り、彼の熱烈なる信念、剛健なる奮闘に立つのが日本の爲めによいかと言つたならば、尙に見易きことであります。それを未だ思ひ切つて、ヨウ言ひさらんのは、學者でも政治家でも腰抜けが多いからで、何か己れに爲めにする所の精神があるが故に、之を明瞭に論斷し得ない、尙に卑しむべき心情ではなからうか。吾々は眞理を眞理として語るが故に、如何に彼等多數の勢力があつても、斯様なものを何時までも保持すべきではない、今日は改造の聲が盛んであるが、

佛教復活を期するには、理想的なる佛教を復活しなければならぬといふは、當然の歸結であらうと考へます。

### 六郎恒長御消息

この中にもやはり法然の邪義と念佛の教が方便だといふ事が出て居りますが、一箇處要文を摘出すれば、第二の巻に云く今此三界等と云々、此の文は日本國六十六箇國島二つの大地は教主釋尊の本領なり、娑婆以て此くの如く全く阿彌陀佛の領に非らず、其の中の衆生は悉く是れ吾子なりと云々、日本國の四十九億九萬四千八百二十八人の男女各々父母ありといへども、其の詮を尋れば教主釋尊の御子なり、三千餘社の大小の神祇も釋尊の御子息なり、全く阿彌陀佛の子に非ず。(遺文錄)

これは日蓮聖人の極力主張して居る點であつて、肉体の親として言ふなれば無論みなそれ、親があるに違ひないが、この生れかはり死にかはりして行く命の親といふものを宗教は論ずるのである、今生れて居る肉体の親は太郎兵衛の子は太郎兵衛が親に違ひないけれども、その太郎兵衛の子となる前があり、今度また別れて行くその後がある、その限りなき生命の親を論ずる時、そこに佛様が親だといふのである。吾々が人間で居る間は親子の關係がどうしても重い事に判つて居るけれども、この親子が相別れて、親も死に子も死んでしまつて、ごつちも墓に成つて残つて居る、戒名としては石に列べて彫りつけてあれば何時までも喰つて居るけれども、戒名の字は喰つて居つてもその命は何處に行くか、親は罪を作つて豚に生れて居る、息子の方も餘り善い事をせんものであるから犬に生れて居るといふやうな事になつたらば、犬と豚と出會つた所でさつぱり親愛の情はない、その憐れな豚、憐れな犬も尙ほ且つこれを感んで、

どうぞして救はうといふのが、是れが絶対の佛の慈悲である。その命といふもの、續いて行くことから考へて宗教は起つて居るものである、命が前の世にも無い後の世にも無いと言つたら、宗教は要らぬものである。生命の無限を根本にして考へない人は實に憐れな人間である、日本の文明が現代非常に低いものになつて来たのは、徳川時代の儒者、それから神道の方でも命の問題を發揮しなかつた。神道では死んで魂が亡くなるとは決していふのではない、やはり神様があるし、現在では招魂祭といふものがあつて、九段には靖國神社があつて年々お祭をして、御馳走を供へて「來り享けよ」といふのであるから、魂は死んでも亡くならない事を知つて居る譯ぢやけれども、それが有るやうな無いやうなボンヤリして居る「來てお食ひ下さい」と言つても宜いし、消えて亡くなつたといふても宜いやうな工合のもので、實に不透明である。「來り享けよ」と言つても芋が好きだつたから芋を上げるといふやうな譯で、死んでもやはり芋が好きだと思つて居るやうな頭腦である。「親父は酒が嗜きだつたから」と言つて酒を供へて見た所で、若しも親父が蛇にでも生れて居つたら、酒などは何にもならぬ、寧ろ蛙でも捕つて來てやつたら宜いといふやうなものぢや。その點は神道でも儒教でも非常に宗教意識が幼稚である、儒教でも死んで魂が亡くなるとは言ふのではない、宋の朱子あたりからは魂の問題を忘れて來たけれども、宋以前の儒者は魂の存在を認めて居る、殊に孔子は易をやつて居るから、易の中には「遊魂爲變」と言つて、魂は決して消えるものではない、神様もあるもので、八卦見が手で斯んなことをやる時には神様が出て來るといふ事を信じて居る、所謂感通を信じて居る、けれどもそれも確かに神様があるのやら無いのやらハッキリせん、掌を合せて妙な事をやつて居るから神様を拜み居るのかと思ふとさうでもない、掌を後ろに廻してやつても構はぬといふ

やうな譯で、甚だ粗雑な宗教意識である。それ故に徳川時代に神道が頭を擡げ、儒教が頭を擡げて來た、さうして佛敎の方はあの厭世悲觀と超越なる弊害とを現はした淨土門と禪宗が勢力を得て居つたが爲めに、徳川時代に勢力を得た儒者の爲めに佛敎がやられてしまつて、とうとう排佛論まで出て來た、御一新と同時に「佛敎は滅してしまへ」といふ迄になつた。さうして一方頭を擡げたのが今の神道と儒敎の幼稚なる宗教思想であつたが故に、日本人の宗教心が非常に淺薄になつて居る所に、佛蘭西式の科學の文明を入れた。それだから日本の智識階級の頭腦は、宗教心が洵に茫漠として、先づ無いといふ方が宜いのだけれども、あるとしても唯だ頭を下げて居るといふやうな工合のもので、それ以上の意識は無い。それは洵に日本の文明が今日は低い譯である、昔の聖徳太子時代の文明、或は桓武天皇時代の文明、その他歴代の佛敎旺盛なる當時の日本の文化は、さういふ粗雑なものではなかつた、それ故にその當時の神道でも佛敎でも、生命の無限といふ問題は一切佛敎に譲つて、唯も口が利かないで居つたものである。然るにその佛敎の厭世悲觀の方面は弊害を捉へて、無限の生命の問題をも一緒に葬らうとした所に今日の大失態が起つた譯である。弊は弊として論ずるがよいけれども、この宗教の限りなき命に對する事柄は決して捨てることは出来ない。これは一日も早く眼醒めなければ、日本の國家は亡びてしまふであらう、亡びてから申譯が無いと言つても追ひつかぬ、その時になつて聖徳太子や桓武天皇やお釋迦様の前に詫言つたり、閻魔法王に弊害百出する、政治の上には賄賂公行といふやうな事が現はれて來るし、それは今日のやうに一人や二人が牢に打込まれても中々直るものではない、捕まる者は百人の中の一人位で、捕まらん者でも皆やつて



居るに違ひない、そんな事は言ふだけ野暮だ、或は政界の競争でも幾ら取締を嚴重にしても、選挙費用は一層餘計かゝるやうになつて来る、その使つた金は何かの方法で取りかへさうとする。商業の方面でも借倒す方がえらい位になつて、實に奇いことになる、私は能く知らんけれども、商業界に於ては何處に安定があるか判らん、實は危ないものである、會社でも一時バツとやつて、散々旨い汁を吸つて置いて投げ出す投方もあるし、或はウンと借金をして一方には金を隠して置いて、會社を潰してしまふ、却つて潰した方が自分には金が出来たりするやうな、いろ／＼虚々實々の策法がある譯ぢや。それは會社のさういふやうなやり方を互ひに競争して行つて見た所で、結局駄目なものである、やはり道徳に戻り宗教に戻らんければならぬ。それには唯だ理窟だけで行くものではない、先づ信仰に戻りさへしたならば、百の議論を超越して人格の根本が立つ、その信仰を捨て、あとの道徳論ばかり捏ね廻して居るから、それは言ひやうでどうにでもなるといふやうに考へて、「お前のいふ道徳はさうかも知らんけれども、俺の方は斯うだ」と言つて、道徳の争ひもやはり商賣の虚々實々と同じ事になる、思想の戦ひもやはり虚々實々を闘はして行くのであつて、さうして口には道徳を言うて心では罪惡を辯護せんとすることになつて来る、それ故にこれは高い所から見下して、經世經國の活眼の士があつたならば、百の議論を捨て、先づ佛教の健全なる信仰に戻れといふことを、國民に警告しなければならぬ。その意味に於て日蓮聖人がいろ／＼仰しやることは、誠に有難いと思ふのであります。

南條兵衛七郎殿御書

この中にはいろ／＼御紹介する必要な所がありますが、ひとり三徳をかねて思ふかき佛は釋迦一佛にかぎりたてまつる、親も親にこそよれ釋尊ほどの親、師も師にこそよれ、主も主にこそよれ、釋尊ほどの師主はありがたくこそはべれ、この親と師と主との仰せをそむかんもの天神地祇にすてられたてまつらざらんや、不孝第一の者なり。(遺文錄)

この所には主師親に三徳を兼ねたる親は釋尊一佛に限るといふ事を説いて、釋尊を捨てるのは不孝第一の者であると論せられて居る。それから、

善は但善と思ふほどに小善に付て大惡の起る事をしらす。(遺文錄)

これは善い事だからと言つても、その善い事をする爲めに一方に悪い事をするやうになることがあるのである。例へば今日自分の個人を尊重するといふことは悪い事ではあるまい、けれども個人尊重といふことの爲めに忠孝の道徳を捨てるやうなことになるて行くと、個人を尊重するといふ小さな善の爲めに、國民の歴史的に發達したる忠孝道徳を捨てるといふ大きな悪い事が起つて来る。女房を可愛がるといふことは悪いのではないけれども、女房を可愛がるが爲めに今迄大恩を受けた親を忘れるといふことになれば、それは悪いのである。碁を打つといふことは一種の娛樂であるから悪い事ではないけれども、碁を打つ爲めに商賣の方が留守になつてしまつたといふ事になつてはいかぬ。何でもその事自身だけを捉へて悪くないと言つて、それで辯護がついたと思ふたら間違ひである、モット／＼大きな善い事をしなければならぬのである。例へば坊さんでもお經を讀んで居るのは悪くはないけれども、朝から晩まで唯だ暗誦で覺へたお經をチャブ／＼やつて居る、それだけではいかん、モットこの日蓮主義を奮闘的に發揚しなければならぬ

といふ大きな事がある、それを「私はお經を讀んで居ります、悪い事はありませんまい」といふやうなのは馬鹿漢である。その現在爲して居る事よりは心得といふものが大事なのである。勞働問題でも、勞働者の幸福を圖るといふことは悪い事ではあるまい、けれども勞働者の幸福だけが國家の大事な問題ではない、先づ國家の興廢存亡といふ大きな問題の中に、勞働者の幸福も金持の幸福もすべての幸福がある、國の事を忘れて勞働者の事だけを言つて、國は弱つても構はぬといふことになる、それは小善の爲めに大惡を犯すといふ事になつて来る。それが日蓮主義の大事な點である、他の道德宗教は小さな善でも善は善だと言つて、大きな善を忘れて大惡に陥る。法華經は大善を捉へて小善をそれ／＼活かして来る所の、高きに登つて下を踏すやうな教であるといふことを、日蓮聖人は主張して居るのである。

それから進んで日本は専ら法華經の弘まるべき國であるといふ事を詳しく御紹介になつて居る。

抑々日本國はいかなる教を習つてか生死を離るべき國ぞと勘へたるに、法華經に云く、如來の滅後に於て閻浮提の内に廣く流布せしめて斷絶せざらしむ等云々、此の文の心は法華經は南閻浮提の人のための有様の經なり。彌勒菩薩の云く、東方に小國有り唯大機の有り等云々、此の論の文の如きは閻浮提の内にも東の小國に大乘經の機ある歟、筆公の記に云く、慈典は東北の小國に有縁なり等云々、法華經は東北の國に縁ありとかゝれたり、安然和尚の云く、我日本國皆大乘を信す等云々、慈心の一乗要決に云く、日本一州圓機純一等云々。(道錄文)

といふやうに、法華經が特に日本國に縁が有るといふ證據を列挙し來つて、

釋迦如來、彌勒菩薩、須梨耶菩薩三藏、羅什三藏、僧肇法師、安然和尚、慧心先德等の心ならば、日

本國は自ら法華經の機なり、一句一偈なりとも行せば必ず得道なるべし、有縁の法なるが故なり。

(道文錄五二二)

と仰せられた、如何にも日本國と法華經と深い因縁關係ある事を能く證據立てられて居ります。さうして尙ほ斯ういふ事を仰しやつて居る。

されば法は必ず國をかながみて弘むべし、彼國によりし法なれば必ず此の國にもよかるべしと思ふべからず。(道錄文)

法といふのは教であります、教はその國の歴史なり國體なり事情に鑑みて弘めて行かなければならぬ、他の國によかつたからと言つて、必ずしも日本國によいとは言へない。假りに基督教が西洋に適したからと言つても、日本は國體も違ひいろ／＼違ふ、それ故に他の國によかつた宗教が直ちに日本によいとはいへない、又念佛の宗旨もたやうなものは支那の方に於てはよくとも、日本にはよいとは言へない、日本の國は日本に適する意味に於ての佛教を見て行かなければならぬ、それには法華經が宜しい、法華經と日本國とは全く國家の理想目的と一致したる宗教となつて居る。これも何も日蓮聖人が始めて仰しやる譯ではない、元來聖德太子に依つて法華經が擧げられ、佛教大師に依つて法華經が盛んになつた、その法華經の精神を明らかにされたのが日蓮聖人であつて、本尊を奠め信仰を定め、立正安國の精神を徹底して説かれた迄のもので、法華經が日本と合体するといふ事は、桓武天皇も御承知になり、聖德太子も御承知になり、又朝廷に於ては今日も皆法華經を中心として宮中では御信仰になつて居るやうに承つて居るのである。日本國と法華經といふことは何も新しい事實ではない、後醍醐天皇が吉野の山で崩御になる時でも、その史

實を見ると、左の手に法華經を握つて右の手に劍を按じて、京都の方を向いて崩御になつて居る、さうしてその姿勢を改めずして葬れといふことも遺訓されて居る。當時京都があつた通り足利が跋扈して、南朝は吉野の山に遁れてお出でになつたものだから、その復興を圖られる上からも京都の方を睨んで崩御になつた、この姿を改めてはならん、この儘葬れと仰しやつて居る。天皇は法華經を握つて居られるのである。であるから精神の教化としては法華經を重んずるといふことは、日本の文明史を通觀したならば、どうしてもこれは反對すべき理由はなからうと思ふのである。それから同じ御書に、

今年も十一月十一日安房の國東條の松原と申す大路にして、申酉の時數百人の念佛等にまぢかけられ候て、日蓮は唯一人十人ばかり、ものゝ要にあふものはわづかに三四人なり、いる矢はふる雨の如し、撃つ太刀は電の如し、弟子一人は當座に撃ち取られ、二人は大事のてにて候、自身もさられ打れ結局にて候し程に、いかが候けん撃ちもらされて今まで生きてはべり、いよいよ法華經こそ信心まさり候へ。(遺文録 五二四)

これは小松原の法難の光景を書かれて居る、尚にその時の反對者のやり方は激しかつたことが見えるので「射る矢は降る雨の如し、撃つ太刀は電の如し」とあります。斯の如くして日蓮聖人を暗殺しやうとした譯であります。

### 木繪二像開眼之事

これは木像、畫像の開眼は法華經に依つてやるが宜しいといふ事を示されたのであるが、別段紹介する

所もありませぬ。

### 女人成佛鈔

これは法華經が特に女人の成佛を説かれた教であることを述べ、法華經に於ては八歳の龍女の成佛したことは無論であるが、その他に女人成佛の事が澤山擧げてある。能く世間の人は提婆品の女人成佛といふ一つだけしか言はんけれども、法華經はさうではない。

然るに龍女畜生道の衆生とて戒緩の姿を改めずして即身成佛せし事は不思議なり、是を始として釋尊の姨母摩阿波蘭波提比丘尼等、勸持品にして一切衆生喜見如來と授記を被り、羅喉羅の母耶輸陀羅女も眷屬の比丘尼と共に具足千萬光相如來と成り、鬼道の女人たる十羅刹女も成佛す、然れば尙殊に女性の御信仰あるべき御經にて候。(遺文録 五三三)

斯の如く多くの女人成佛の證據が擧げられて居る、さうして法華經は有難いお經であつて譯も信するのが當り前だけれども、殊に婦人に縁の深い女人成佛の教として古來尊崇されて來て居るのである。これは支那に於ても法華經翻譯の當時から、女性が法華經に味方をした歴史を有つて居るので、日蓮聖人も「殊に女性の御信仰あるべき御經にて候」とお書きになつた。

### 藥王品得意鈔

これは「藥王品」に十種の譬があつて、法華經は大海の如く日天子の如くといふやうな、非常に法華經

が有難いといふ事の譬が十種説いてある、殊にこの文章には海の譬について詳しく書いてありますが、二御紹介すれば、

分別功德品より十二品は、正には壽量品を末代の凡夫の行すべき様、傍には方便品等の八品を修行すべき様を説くなり。(遺文録 五三四)

この法華經の終ひの方の流通は、正には壽量品、傍には方便品といふことになつて居る、この「傍正」といふことが古來いろ／＼議論になつて居るけれども、これはやはり善い事である。傍正といふことは同じ法華經でも、例へば方便品とお自我偈と兩方讀むことが出來ぬ時には、どつちを略するか、それはその時の都合でお自我偈を讀まずに方便品だけでも宜しいといふ事は一度もない、如何なる場合でも方便品の所で終つて「本末究竟等、南無妙法蓮華經」と言ふことはいけぬ、二つ讀むことが出來ぬ時には、壽量品だけ讀んで「速成就佛身、南無妙法蓮華經」と言ふ方でないならぬ。それ故に方便品と壽量品との關係に就ては、言ふ迄もなく壽量品が尊といのである。そこで傍正といふ言葉が茲に擧つて居る。この事に就て一致派といふやうなものが出來て日蓮教義を混亂せしめた罪も餘程深いものである、それが爲めに壽量品の尊とい事を抑へやうとして、法華經の見方の中心點を立てなくなつてしまつた。だから今のざらつべしの法華宗は、唯だ法華經が有難い／＼といふ、「何處が有難いか」「何處かつてそんなことはどうでも宜いぢやないか」といふやうな有様である、それでは駄目だ、「それは此處だ」といふ所を抑へて、「いざ容を改めて坐せよ、語らん、日蓮に依つて教へられたる法華經とは……」といふことでなくしてはいくまい。それを法華經なら何處も此處もあるものかと言つて誤魔化して行く態度、それが既に日蓮の徳ではあ

るまい、そんな不都合な事を誰が教へたか、實に日蓮聖人に濟まぬことである。法華經は以前から日本にあるけれども、唯だこれを雜然としてやつて居つた爲めに、日蓮が出てこの中の尊とい意味合ひを發揮したのである、一つを抑へれば此處、二つを抑へれば此處といふ風にして、法華經の内容を紹介して日蓮主義は立つたものである。目鼻つけずの法華經ならば何も日蓮が出て來ないでも宜い、却つて出て來ない方が宜かつたらう、寧ろ面倒を言はずに濟むものならば、「聖德太子でも傳教大師でも法華經を重んじた、何でも宜しい唯だ法華經だ」と言つた方がモツと弘つたらう、一方に非常な敵を控へながら内輪がグニヤ／＼であるといふことになれば、これは内外とも非常な損害といふものぢや、この位外に敵を引受けるならば、己れの立てる所が正しく確りして居なければいけぬ。理義をモツと明らかにして進まなければ、内輪にはグズ／＼の信者があり、外には種々なる敵を受けて、法華經をしてその發揚を妨げしむる者は日蓮主義者なりといふ事になつてしまふ、そんな事ならばさらりさつぱりやり直した方が宜しい、これは大いに醒めなければならぬ、マアその中眼醒める時機も來ませうが、今日の所では未だ危ないものであると思ふ。

それから次に法華經の關係が洵に能く説いてあるので、これも一致派でいふやうなことを言ふのはいかんである。

日中には星の光消ゆるのみに非らず又月の光も奪ひて光を失ふ、爾前は星の如く法華經の蓮門は月の如し、壽量品は日の如し、壽量品の時は蓮門の月未だ及ばず、何に況んや爾前の星をや、夜の星の時月の時も衆務を作さず夜曉けて必ず衆務を作す、爾前蓮門にして猶生死を離れ難し、本門壽量品に至

つて必ず生死を離るべし。(遺文録)

洵に明白であつてモウ説明を要しない、これを誤魔化して懸からうとするから、始めから「イヤ日も月も同じやうなものだ、ごつちが明るいナンて言はなくても明りは明りです」といふやうな事を言ふ、それは誤魔化し根性といふものぢや。日蓮主義は正を正とし邪を邪として行く所の嚴正主義でなければならぬ、それを誤魔化してかゝるといふ、所謂ドンドコ法華、平法華といふものは日蓮主義の風格に違はない、無論頑固なことはいかん、無駄な所に力を入れる必要は無いけれども、どうしても命に懸けても守らんならぬといふ正義を明らかにして進まなければ、日蓮主義の眞意は傳はらぬ譯であらうと思ひます。

聖愚問答鈔

これは既に聖訓要義として全部御紹介したのであります。

法華題目鈔

この御書は清澄山に於て書かれたので、廣く行はれて居るものである。

夫れ佛道に入る根本は信をもて本とす、五十二位の中には十信を本とす、十信の位には信心初めなり、たとひさととりなければ信心あらん者は鈍根も正見の者なり、たとひさととりあれども信心なき者は誹謗闡提の者なり、善星比丘は二百五十戒を持って四禪定を得十二部經を誦にせし者也、提婆達多是六萬八萬の寶藏ををばへ十八髮を現せしかども、此等は有解無信の者なり、今に阿鼻大城にありと聞く、

又鈍根第一の須臾樂特は智慧もなく悟りもなし、只一念の信ありて普明如來と成り給ふ。(遺文録)

これは何處までも信心を本にしてお説きになつたのは、「法華題目鈔」に於て頗る明白なことである、日蓮主義は何處までも信行本位だといふは争ふべからざる事である、それに續いて殊に法華經の有難い事が信仰の意味から説かれて居る。

さればさせる解なくとも南無妙法蓮華經と唱るならば、惡道をまぬがるべし。譬へば法華は日に隨つて回る、蓮に心なし、芭蕉は雷によつて増長す、是の草に耳なし、我等は蓮華と芭蕉との如く、法華經の題目は日輪と雷との如し。犀の生角を身に帶して水に入れぬれば水五尺身に近つかず、柎椹の葉開きぬれば四十由旬の伊蘭髮す。我等が惡業は伊蘭と水との如く、法華經の題目は犀の生角と柎椹の葉との如し。金剛は堅固にして一切の物に破られざれども、羊の角と龜の甲に破らる。尼俱類樹は大鳥にも枝をれざれども蚊の體に巢をくう鶴鶴鳥に枝をれぬ、我等が惡業は金剛の如く尼俱類樹の如く、法華經の題目は羊の角の如く鶴鶴鳥の如く。琥珀は塵をとり磁石は鐵を吸う、我等が惡業は塵と鐵との如く、法華經の題目は琥珀と磁石との如し、かくをもひて常に南無妙法蓮華經と唱ふべし。

(遺文録五八四)

これは如何にも南無妙法蓮華經の有難い事がよく説かれて居る、唯此處で一つ注意しなければならぬのは、この題目は唯だ唱へさへすればよいといふことになつて、これか餘程ドンドコ法華の方に擴つて居るけれども、これが所謂佐渡以前の教であつて、實はいかんである、唯だ南無妙法蓮華經では日蓮主義は立たぬ。これだけで宜いならば「佐渡以前の法門は佛の爾前の經と思召せ」と日蓮聖人は言はないのであ

るけれども、同じ題目を唱へてもその意識が明らかでなければ駄目だといふ事を説いたのが佐渡以後の法門である。それ故に「開目鈔」があつて第一に主師親の三徳を心得なければならぬ、即ち本佛に對しての意識がなければならぬといふ事を説いた。この唱へ言としての題目を第一に置いて行くのは、淨土宗などの稱名念佛の式から考へた時には斯うであるけれども、これは日蓮主義の正統なる教義ではない。その事は屢々この講壇に於て語り盡したことであるから、唯だ一言注意をして置きます、本佛に對する意識なくして南無妙法蓮華經の言葉だけ覚えて、これが鬼子母神様に行つたり帝釋様に行つたり、蛇に行つたり狐に行つたりするやうなお題目は、すつぱり廢めなければいけない、それは萬有神的思想で、意識の混沌たるものである。題目の南無妙法蓮華經といふ一つの言葉があつて、それが何にでも喰つて行く所謂萬有神で、「何でも神様だ」といふ、さうして此方に行けば蛇を拜む、此方に行けば又狐を拜む、「法華勸請だから何でも宜い」といふ、それならば眞言の萬有神的思想と何等違ふ所はない。日蓮主義は法華經に依つて本佛を中心にした統一神的思想である、一つの大人格者を本佛の上に顯本したる統一神、絶對無上の人格者を本にしたる宗教であつて、蛙でも猫でも何でも宜いといふやうな萬有神的思想とは全然違ふ、同じ題目でも、聲は同じでも、萬有神の意味たる信仰と、統一本佛に立つた信仰とは、天地月龍の相違あることを知らなければならぬ。名を一つの題目に藉りて、萬有神の散漫なる信仰と、統一本佛に立つた最高の信仰とを混亂せしめんとする者が、無學なる日蓮の教徒の中に多いのである、其處では我が統一閻の講壇にお集りになつた諸君は、「お前のは萬有神の題目ではないか」といふ言を以て、彼等の迷ひを醒してやつて戴きたいと思ふ。

### 星名五郎太郎殿御返事

この中には眞言宗に於て今の萬有神的思想から流れて來て「何でも有難い」といふことから、畜類を本尊とし、或は愛法を祈るやうな事になつたといふ事が書かれてある、愛法といふのは男根女根の事で、それを拜むやうな宗教になつた。眞言の中にはさういふものがある。併し日蓮宗でもモウ一つ往けば其處まで行くだらうと思ふ、池上あたりでも穴を掘つて狐を入れて、長榮稻荷と言つて、穴守稻荷に負けんやうに勉強して居るが、あそこ迄往けば、モウ一つ勉強すれば男根女根を拜む所まで南無妙法蓮華經で行くだらうと思ふ。この御書の中には眞言が萬有神教であつたが爲めに墮落をして、さういふやうな事になつて居るのを日蓮聖人が非常に慨歎して居られる。それから眞言がいろ／＼不思議といふが變化のしるしといふやうな事をやつて居るが、そんな魔法使ひみたやうな事を信するならば、外道の教に降るが宜いと日蓮聖人は言はれて居る。

若し彼の變化のしるしを信せば、即ち外道を信すべし。(遺文録 六〇二)

それから今申した事を日蓮聖人の言葉を以て紹介すれば、

就中彼の眞言等の流れ偏に現在を以て旨とす。所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り莊園等の望をいのる、是の如き少分のしるしを以て奇特とす。(遺文録 六〇二)

如何にも習ひ損ひの日蓮主義者はその通りぢや、唯だ現在といふ事を現在だけに考へて、無限の生命から考へる方が薄らいで來た、さうして「畜類を本尊とし」——丁度池上の長榮稻荷といふやうなもので、

狐を拜んで居る、一時は随分ひどい事をやつて居つた、大きな狐を祭つて前に茶店があつて、其處に坊さんが袈裟を着けてやつて来て、その狐の棲んと居る穴に向つて「我れ佛を得てより以來」とやつて居つた、それは實にえらい事である、さうして前の茶店では狐を棚に置いて賣つて居る、この頃は廢めたかどうか知らんが、未だやつて居るかも知れぬ。さうしてそれが池上本門寺のお臺所を賑はして居るのぢやといふので、一年一遍の御會式などは大勢やつて来て食つたり飲んだりするから幾らも殘らぬけれども、長榮さんの方は大事ぢや、あれで命を繋いで居る」と言つたものである。さういふやうな愚な事をやつて、或は愛法を祈るとか、唯だ錢金が欲しいといふやうな事を祈るのは宗教の墮落であると日蓮聖人は慨嘆されて居る、それを見るにはこの御書が非常に宜しいと思ふ、それは萬有神的思想の流弊が其處に至つたのであります。

大僧正 本多 尊論

目次

- 一、精言の二、宗教と本教の三、諸種の本尊觀の四、本尊と眞理の五、本尊と倫理の六、本尊と救済の七、佛敎の本尊觀の八、佛敎の三寶觀の九、佛身觀の十、滅後信仰の概観の十一、佛敎本尊の三方面的考察の十二、法華經に顯はれたる本尊の十三、遺文に顯はれたる本尊の十四、本尊の動説文の十五、本尊勸請の實例の十六、遺文の會通の十七、異論の解決の十八、結論

定價 布製一部 金七十錢 送料金四錢

發行所 名古屋東區田代町常樂寺内 立正結社 編輯局

教 觀 不 離 (三)

大僧正 本多 日生

安樂行品に至つては、轉輪聖王がその髻中の珠を與へられるといふことがある。武將となつて非常な戦功のある者には、轉輪聖王が自分の髻の中に戴いてござる最高の珠を執つて以て、汝の殊勳に酬ゆるに之を與へると言つて授けられる、その時の名譽はごうであるか。これは金錢の問題ではない、思想がズツと高いからして、モウ一つそれを飛び越えて、王様の髻の中に在る珠をとつて、多くの武將の集つて居る凱旋の祝宴の席上に於て、最高殊勳者として與へられた、その將軍の精神狀態はごうであるか。これ亦人生に於ける最高感激の狀態であると思ふ。

又その前にある所の彼の醉人が袂の中に珠を發見したよろこびの如きも、友人が珠を與へて去つたけれども醉ばらつて居るが爲に知らずして乞食をして流浪を續けて居る所に、友人が歸り來つて言はれて氣が着いて袂の中を見れば、その尊とき珠が傷つかずして在つた、これを財に換へて思ふ物を悉く買ひ求めて幸福なる生活に入つたといふ、この乞食が一躍して安穩なる生活に復つたといふことも、人生生活の上に於ける最も完備したる喜悦を現はしたるものであると思ふ。

斯様の有様に法華經の信仰は説かれて居る。さういふ教の精神を傳へなければならぬのである。日蓮聖人は餘程能くその意味合に依つて信仰を鼓吹せられた、殊に日蓮聖人の非常な艱難辛苦の中にそれを現

されたからして一層油切である。物はたゞ平凡で行けば有り難さといふものが出来て来ない、乞食をして居つた者が長者の家督相續をするといふ所に非常な感激があるのである、富裕な家庭に居つて可愛がつて育てられて大きくなつた者が家督相續をしたのでは大した喜びは出て来ない。光の既にある所に火を點しても喜びはない、暗い所に火を點するので始めて喜びがある。乞食の生活をして居つた子供が戻つて家督相續をするといふやうに、ちようど反對の傾向を現すことに於て最も強く人生の喜びを感ずるのであるが、日蓮聖人は一面から見れば迫害多難の生活を遂げて、或は頸の座に、或は流し者に、或は讒謗迫害の中に立つて、而もその信仰の力はさういふやうな厭ふべき事柄を悉く撃破して何時でも強き喜びに満ちて居られた。龍の口に於ては「これ程の喜びを笑へかし」と言ひ、伊豆の伊東に於ては「流されたればこそ夜も晝も法華經の修行が出来るのである」と言ひ、佐渡が島に於ては「この雪の中に暮すといふことはこれが御佛に對する勤めである、佛からお褒めの言葉を戴くことが出来る」と言つて、雪が降り積つて寒さが身に滲めて来る、その膚をつん裂く寒風に比例して日蓮聖人は喜びの心を増したのである、さうして「當時のせめは堪ふべくもなければも未來に大樂を得れば大いに悦ばし」御勤氣を蒙ればいよ／＼喜びを増すべし」と言つたのである、その辛い中に喜びの心が躍動したことを、日蓮聖人は鮮かに教へて居るのである。

今後の人生社會に生活して行く上に、宗教の信仰が第一に役立つといふことはこの點である、人生は境遇事情に依つていろ／＼違ふけれども、如何なる境遇の者でもさう思ふやうな事はかりであるものではない、寒い時もあるし辛い時もあるけれども、信仰の力に依つてそれを撃破して行けば、何時も感激に満ちたる生活を續けることが出来る。朝眼が開けばいきなり心に浮ぶものは有り難い感激の精神である、顔を洗つても感激の精神である、いろ／＼な面倒な事にぶつかつても、感激の精神がこれを救ひこれを助けて呉れるといふことになつて行くのが、法華經の一番大きな力であると私は考へるのである。

さうして直ぐに引續いて起つて居るものは、たゞ悦びであり力であるばかりではない、今度は積極的理想を描いてこれを實現せんとするところの願行努力といふものが法華經の信仰である。法華經はたゞ消極的な、罪を勘辨して呉れとか、地獄へ落ちるのを引つ張つて呉れとかいふやうな薄弱なるものではなくして、積極的に自ら進んで善を行ひ徳を積み、立派な願行を成就すべく發展進取して行くところの信仰を教へたものである。又それが人間の本分である、人として世に存する以上は、たゞ助けて呉れる頼むといふばかりではいけない、自ら進んで徳を行ひ善を積むといふことが、人たる者の最も大事な點である。ところがそれは法華經を見るときといふと、これ亦極めて鮮かであつて、序品の最初から文殊菩薩と彌勒菩薩と問答をして居る、その精神を見ても、彌勒は文殊と同じやうに過去の日月燈明佛の時に法華經に修行に入つただけれども、彼は小さな名譽や小さな慾望に墮落して淨き願行を立てず、積極的にやる者が無かつた爲に「求名」と言つて小さな名譽を求めたり、虚榮心の奴だといふ評判を受けてお前は永らく辱めを受けたのであつたといふことを、文殊菩薩が彌勒菩薩に對して言うて居るのである。これはやはり法華經を信する者の心得をいきなり序品の時に警告をして居るのであつて、法華經の中に入つて信心するとか、修行をするとか、宣傳をするとかいふても、若し小さな名譽心などに囚はれて、堂々たる願行を失墜するならば、即ちそれは第二の求名である、憐れなる者であるとして警むべく、序品の時からその話があ



る。さうして日月燈明佛に託してはあるけれども、これは今の釋迦如來が涅槃の際も同じことである。縦  
 ひごのやうな立派な教があつても、どのやうな立派な意味合が示されて居つても、それを受けて實行して  
 行く側の人に、一心に精進して放逸を離れてその道の爲に奮勵努力するといふ、願行が無かつたならば、  
 何の役にも立たないぞといふことを徹底的に訓戒されて居るのである、それが序品の最も強い意味に現さ  
 れて居るところである。法華經を説き終つて、結構な教は現れたけれども、併し汝等がこれを遵奉して行  
 く上に於て活き／＼とした願行が無かつたならば法華經は何の役にも立たないぞと止めが刺されて居るの  
 である。

それからこの實行の事柄に就ては、法華經は割合にその事が澤山書かれて居るので、まだ十分法華經の  
 中心思想を説かない時から、これを實行して行くことに就ての獎勵鞭達が示されて居る。第十番目の法師  
 品の如きは即ちそれであつて、法華經の修行する善男子善女人、それは皆な法師である、その善男子善女  
 人は窃かに一人の爲にも法華經の意味合を語り傳へて行かなければならない、唯ドンドコ法華といふやう  
 な風に聲ばかり張り上げて居るのが法華經の修行ではないといふことが、法師品の中にアリ／＼と説かれ  
 て居る。如來に遣はされて如來の事を行する者である、それは即ち如來の御仕事を御手傳ひする者である  
 といふ願解の下に法華經の爲に奮勵しなければならぬといふことである。それ故にのらくら者は法華經  
 の修行が出来ない、不懈息の心を以てと申して、懈けない、發奮興起する精神に依つてそこに法華經は行  
 はれてると説かれ居る。又提婆品の薪を拾ひ水を汲み千歳の間つかへて得たといふこともやはりそれで  
 あつて、千歳の長きに亘つて給仕奉公したけれども、身も心も嘗つて倦み疲れるといふことは無かつたと

仰せられるのは、教の爲には強き願行を確立すべきことを示したのである。又勸持品に至つては三類の敵  
 人が起るとも法華經の行者は住む心無く、退く心無く、願行に向つて猛進しなければならぬと説かれて、  
 それがすつと續いて藥王品には臂を焼いたとか、或は妙音品には妙音菩薩が法華經の爲に斯の如き努力を  
 したといふことがすつと流通の一段に至り、詳しく説かれて、法華經の願行はアリ／＼と示されて居るの  
 である。無論法華經の中心思想は本佛釋尊の有り難いことを現すのであり、唱へ言葉としては南無妙法蓮  
 華經であるけれども、その南無妙法蓮華經は本佛釋尊の御功德、本佛釋尊の御力を傳へるところのものだ  
 といふことを明かにするので、これを切り離しては法華經とはならないのである。

それは教観不離の關係から見れば直ぐわかることであつて、壽量品が法華經の中心思想だといふことは  
 異論の無いことである。その壽量品は誰が讀んで見てもアリ／＼と佛様の尊とい事が現れて居るのである。  
 法華學者はその文の底に特別なものがあるといふやうなことを言ふけれどもそれは大間違ひである。それ  
 はちようど日蓮聖人が立正觀鈔に、

何に況や止觀は法華經に勝るといふ邪義を申し出すは、但是れ本化の弘經と透化と弘通と、像法と末  
 法と、迹門の付屬と本門の付屬とを末法の行者に云ひ顯はさせむ爲の佛の御計也、爰に知んぬ、當  
 世の天台宗の中に此義を云ふ人は、祖師天台の爲には不知恩の人なり、豈其過を免れんや(中略)其末  
 學其教釋を悉く習ひて失なき天台に失を懸けたてまつるは豈大罪にあらずや。(續遺文)

と慨かれて居ると同じことで、天台と法華經の關係に就て言へば、天台の摩訶止觀が法華經よりも勝  
 れりと天台の末學が言ふのは非常な誤りである、法華經と同じと言ふすらもそれは大きな間違ひである。

それと同じやうに、日蓮聖人が偉いからと言つて、法華經の毒量品を輕んじて、モウ一つ文の底に日蓮の説き始めた獨創の所があるなどと言つて、日蓮を擧げて釋尊を抑へ、日蓮の遺文を尊んで法華經の毒量品を抑へるが如きことをするのは、日蓮聖人がこの御書に於て「天台の末學その教釋を惡しく習うて失なき天台に失をかけたてまつる」と言はれたやうに、失なき日蓮にその失をかけたてまつるといふことになるのである、それが教觀不離の大事な點である、日蓮門下が、天台の末學が天台の止觀を尊んで法華經より勝れりと言つたが如くに、日蓮の遺文は尊とい、法華經はたゞ一般的の舊い物語だといふやうなことを言ひ出す者がある、それは非常な間違ひであつて、日蓮聖人の遺文に依れば左様なことほど畏れ多いことはない。「祖師天台の爲には不知恩の人なり」と仰せられたが、この言葉に移して言へば、日蓮聖人に對しては不知恩の者なり、豈その罪を免れんやといふことになるのである。

だから法華經の中心教義は何もさう面倒なことではない、毒量品に依つて考へて見たならば本佛釋尊の尊だか、さうして是好良藥として題目の與へられたこと、遣使還告の使として上行菩薩をお遣はし下されたこと、悉く歴然として經文の表に出て居ることでありませう。

それ等の信仰を中心として活躍するところの顯行は、正法を興隆して各人を教化するのみならず、往いては我國の名教を明かにし、我國の使命を世界に輝し、内には立正安國の國家を建設し、外には皆歸妙法の文化を創造して、釋尊のこの世に御降誕なされたる大目的を成就しようとするのが、如來に遣はされて如來の事を行するといふ法華行者の本分である、そこまでこの法華行者の顯行を考へて行かなければならぬ。

私は今この時代に於ては日本國民の自覺も東洋民族の自覺も、どうしても釋迦如來に依つて導かれなければならぬと思ふのである。印度の志士ガンヂーが昨年の釋尊降誕の日に於て印度人に告ぐるに「我國には三千年の昔釋迦といふ偉人が出た、世界第一の偉人が出た、その釋迦が教へたことは今日の印度人の最も大切に考へねばならぬことである、釋尊の教は先づ人格を本とし、教を明かにして進んで行かぬ限りには、眞の勝利も幸福も來らないといふことを説かれたのである」と言つて、印度人に警告したといふことであるが、日本でも今一番大事なことはその點であらうと思ふ。今は日本人が人格に還らなければならぬ、あらゆる方面の人格が頹廢をし、その結果思想も混亂をするのである、思想の混亂といふけれども第一は人格が腐つて居るのである、人格の腐つて居る人間といふものは、善い事と悪い事とを示しても好んで悪い方へ行くのである、即ち犬にして見たならば、小判と銅の頭とをそこへ列べて、こつちは小判だ、こつちは銅の頭ぢやと詳しく説明をして「だから小判の方が宜いぢやないか」と言つても、犬はワンと言つて銅の頭に嚙じりつくのである、人格の低級な者は、明かにこれは小判である、これは銅の頭であるといふことを説明しても、ワンと銅の頭を喰はんとする者である。故に先づ以て人格を陶冶しない限りに於ては、如何に思想問題社會問題と處理せんとしても到底救はれるものではない。

その人格を養ふ根本はどうしても基本人格といふ人間の誠を啓かなければならぬ、その誠は完全なる意味の宗教に來らなければ啓けないのである。假に天道と言ひ、假に神と言ふけれども、纏め／＼て行けば毒量品に現れたる完全なる本佛に到達して、始めて國民の誠を啓き、人格を造り、茲に各人の幸福も國家の隆運もこの一つから起るといふことに歸結されて居るのが、開目鈔といふ日蓮聖人の遺訓の精神である。

それを中心として人各々を救ひ、國家を救ひ、世界を救はんとするところに、廣宣流布の願行が燃えて居るのである。

さういふことは日蓮門下の僧俗男女悉くこれは常識として心得て置かなければならぬと思ふのである。難かしい話ではない、正しき教を明かにし、正しき信仰を立て、人格を磨いて、人各々の人格を通ほして國家に貢献をして行くのである。斯ういふ風に願行に燃えて居る信仰、感激の喜びに満ちて居る信仰が、法華經の全精神である。それが本になつて、或は宇宙觀、或は人身觀、或は佛身觀、その他あらゆる宗教の教義が起るのである。この活き／＼したる感激の生活、願行に燃えて居る所が抜けてしまつては、後は氣拔した精である。いくら教義を明かにしようが、いくら修行の方法を論究しようが、この激濁たる感激を失ひ、願行を失つたならば、残るものは何にもならないものである。

今日正しい意味の本當の日蓮主義が十分に發揚發展しないのは、宣傳者も不十分であるが、まだ日本の國民が眞に自覺せざるが故に、宣傳者の不足と國民の不自覺とに依つて、未だ眞の日蓮主義はその春を得て居らないものであると私は考へる、その春に達する迄はお互にこの教に感激して居る者は、飽く迄もこれを愛護し、これに力を添へてその春の來るを迎へなければならぬと思ふのであります。それに就ても法華經の全精神が正しい意味に於て、教觀不離の意味合を忘れぬやうにして行きたいものだと思ふのであります、それが爲に今日はこの講題を掲げてお話をした次第であります。

(丁)

## 現代宗教家に望む (二)

海軍中將 佐藤鐵太郎

世の所謂僧侶なるものを見るに衆生を濟度して正道に導くべき本分を忘れ葬儀の主宰寺院の維持を以て能事終れりと信じ公然葬商とも惡屬すべき態度を取り所謂附け届けの厚薄と香奠の多寡とを以て式曲の簡教を定め又所謂説教と稱する閑口舌を呈して善男善女に對する自己の立場を編織し學徳低き如何がはしき身を以て傲然自尊の態度を取り國法の許すに委せて軍酒に親み何等俗人と違ふ所なき生活を敢てし而かも常人の住み難き高閣に坐し錦繡の袈裟を掛け絹繡の衣裳を附け輕咳一番威容を飾り自ら以て得たりとするが如きは果して之れを潛越と言ふべきであらうか或は滑稽事として之を看過すべきであらうか更に又願みて一部僧侶の爲す所を見るに或は教學に捉はれ難解の經典と祖文とを列ね徒らに高遠を装ひ故らに社會に超在するの態度をとり之を以て佛者の本領なりと誤解し或は不可解の靈顯を唱へて愚民を註惑し或は唱名を尊重し人道を輕視するが如きは斷じて許すべからざる弊害である此際に當り特に奮起を要すべきは立正大師を仰て其教に従ひ知法思國の所信を以て國民の指導に任すべき日蓮門下の責任であらねばならぬ決して小異を立て、祖師垂迹の目的を誤るが如き場合ではないのである而かも此際更に躍進すべきは左の四五の問題を提げて宗教界の革新を圖るといふの一事である。

一、所依經典と教義より見たる國家と宗教との關係如何、

二、宗教には國境なきや或は國境ありとの見地に立ちて世界を見るや、  
 三、宗教には民族別、人種別等の觀念なきや或は自己の屬する民族又は人種若くは國家に對する見地に立ちて全人類を視るべきや、

四、現下の宗教家は布教を主とするや葬祭及寺院の維持を主とするや、  
 五、現下存在の宗教は國民道德の養成を主とするや或は宗祖紹介の意味に立ちつゝありや、

何は兎もあれ今日は日蓮門下の特に奮起すべき時節である右の五問題の如きは意義極めて明白なるにもせよ之を模稜の間に葬りつゝ日一日を糊塗しつゝあるは如何なる宗教宗派に於ても明かに認め得る處である日蓮門下たるものは自ら省みて大に峻ると同時に祖師日蓮が大旗を翻して鎌倉小町の辻に大獅小吼をなしたるが如く假令學識德行遺憾ながら祖師の一千分の一にも足らずとはいへ二千三百乃至數萬の同志心を一にし此際祖師の念願を果して大孝を全うせねばならぬ之を要するに宗教の本質は暫く措くも現在宗教の取る所にして國民道德と國民思想とに悪影響を生ずるの患ありと認めたる場合に於ては國民の一部か如何に之を信奉するも如何に信仰の自由を奪ふの不可なるにもせよ斷じて之を排除するの手段を取らねばならぬ假令其の教理が如何に巧妙に構成せられ如何に理論的に崇高なるにもせよ我國家我國民に好ましからぬ思想上の影響を與ふべき憂ありとせば明白に之を排斥せねばならぬ此場合に處し爲政者たらんものは決して宗教界の紛擾を恐れて姑息の手段を取り彼等に媚びて一時の苟安を望むべきものではない併しなから其の實際に於ては信仰其物の性質上強制的に之を信せしむる譯には行かぬ從て其の實際の努力はこれを宗教家に委頼せねばならぬのである。

元來宗教家の本分は祖師傳來の教義を宣布するを以て之を全うし得べきものではないので宗教其自身の本來の目的は人類の神性を發揮し人類とし國民とし社會人とし家庭人とし而して又個人として行ふべき大道を教えんが爲めにして祖師其人を讃仰せしめんが爲めに存するのではないのである然るに一部の宗教家には其本來の目的を忘れ其の手段に過ぎざる教義の宣布と祖師の禮讚とに併し世道人心を善導して之を匡教するの本分を忘れて自ら知らざるものさへも少からぬのである吾輩は世法に立たぬ宗教の決して眞の宗教にあらざるを信すると同時に一般に邪教としてこれを見るに躊躇せざるものである而して尙これと同時に世の宗教家が手段の爲に目的を忘れ世法と没交渉に宗教を説きつゝあるもの多きを悲むのである。

之を要するに近來動もすれば公言しつゝある一種の意見として「吾に信念あり何ぞ信仰を要せん」と唱ふる半可通の碎論を抑へて信仰の眞實義を知らしめ宗教の本質と其目的とを縷説して其の本領を明かにし世道人心を整へ國家の隆昌と國民の幸福とを催進し祖師大慈の悲願を完うするに力めねばならぬ漫に宗教を曲解して柱に膠するの愚を學ぶなれば法は永遠なり然れども化導の方便はこれを活用の意義に求めざるべからず譬へば醫術は永久なり然れども療病與樂は其の病性と時機とによりて之を變せざるべからざるが如し唯々祖師の大慈念を心とし時代に對應する自己の立場を定め黨せず偏せず驕然として大同統一の素地に歸せねばならぬ面かも其の本分を忘れ徒らに言を祖教に籍りて人心を惑はし或は交渉を世道に絶ち或は國民思想の調節に對して風牛馬の態度を取るか如きは斷然一鞭を加へて之を拆伏せねばならぬ唯々慈念を以て等く同祖異祖の化導に拆伏を加へて正しき宗教的活動に入らねばならぬ。

# 聖德太子と法華經 (二)

森川日修

聖太子が佛法の中心とし、自ら體現されたる法華經は何れを原本として講述し、又は義疏を御製作なされたかを一應考へてみたい。法華經全譯のもの六部あつて、其内三部は既に逸失し、正法華經、妙法華經、添品法華經の三部が現存してゐる（現今では此外梵本に依つて翻譯されたものがある）其の三部の内羅什譯妙法華經によられたのであるが、現在の妙法華經とは少しく違つてゐる、義疏には經文全部記入してないが、疏文の次第によつて、提婆品と、普門品の重頌偈即ち世尊妙相具以下がない經典であつたことを知ることが出来る。

提婆品は羅什の譯經でなく、揚都の沙門法獻が于闐國より將來せる梵本を蕭齊の武帝の時、瓦官寺に種々の推論があるが、經典に對する史的研究は日に月に各方面よりの確の證據により研究せられてゐるから、昔時の概括的史的教判は動搖來たすことを考へておかねばならむ。

法華義疏に聖太子、妙法蓮華經を疏して曰く夫れ妙法蓮華經は、蓋し是れ慈して萬善を取り合して一因となすの豊田、七百の近壽轉じて長遠となるの神藥なり。若し釋迦如來此土に應現するの大意を論せば、將に宜しく此經教を演べ、同歸の妙因を修して、莫二の大果を得しめんと欲す。但衆生宿植の善徵にして、神闢根鏡く、五濁大機を障へ、六弊その慧眼を掩ふを以て、卒かに一乘因果の大理を聞くべからず。所以に如來時の宜しき所に隨ひ、初め鹿苑に就きて三乘の別跡を開き、各趣の近果を感せしめたり。これより以來、復た平しく無相を説きて同修を勸め、或は中道を明して衰貶すと雖、猶ほ三因

於て外國三藏達摩菩提と共譯せるものにして、後ち羅什譯妙法華經へ加へたものであると、いはれてゐる。

又た普門品の重頌偈は、周の武帝の時北天竺の三藏闍那崛多が、益州龍淵寺に於て譯せし者を後に羅什譯に編入したものであるとのことである。

聖太子はつまり提婆品と、普門品の重頌偈のなき、羅什譯經によられたものである。

（天台は文句に提婆品を釋してゐるが、普門品の重頌偈は釋してゐらぬ。そこで羅什は提婆品も、重頌偈も譯したが、何時か脱漏したものができたのであらう、いや脱漏したのでない、後に念彼觀音力と云ふやうな素人向の經文をこしらへ挿入したものだ

別果の相を明して物の機を養育せり。是に於て衆生。年を歴、月を重ね、教を蒙り修行して、漸々に解を益し、王城に於て始めて一大乘の機を發するに至りて、如來出現の大意に稱會せり。是を以て如來即ち萬德の嚴軀を動し、眞金の妙口を開き、廣く萬善同歸の理を明して、莫二の大果を得しめぬ。

妙法とは、外國に薩達摩と云ふ。然るに妙法は是れ龜を絶するの號、法は即ち此經中に説く所の一因一果の法なり。言ふことゝろは、此經中に説く所の一乘因果の法は、超然として昔日の三乘因果の龜を絶するが故に妙と稱す。

蓮華とは、外國に分陀利と云ひ。此物の性たるや華實俱に成る。此經は因果雙々明し、義彼の花に同じきが故に、以て譬と爲すなり。經とは乃ち是れ聖教の通名、佛語の美號なり。然れども經は是れ漢語にして、外國には修多羅

と云ふ。經の義は法と訓じ常と訓す。聖人の教は、復た時移り俗改まると雖、前主後賢其是非を改むること能はざるが故に常と稱し、物の軌則と爲るが故に法と云ふ。

私に疏意を案じますと、妙法蓮華經は總ての善を悉く一佛乘の因と見るので、聖太子は専ら萬善同歸と云ふことを申しておる、譬へば善はいかに小なりとも一滴の雨水が江となり河となりついに大海に注ぐやうに、微小の善も無極の佛壽に向ふものでありと見られたので。聖太子は法華經を一貫して、萬善同歸と佛壽無極の八字に歸せられておることは洵に透徹した斷案である。法華以前の經は因果各々異にして統一しておらぬ、是れが佛の眞意でない。佛は三乘を説き無相を説くも皆な是れ佛壽無極に達する道程であつて、つまり一佛乘の中にあるもので一佛乘の因と稱するもの、中には三乘五乘の教説即ち是等の教説により修行する善行も含まれておると見

るのである。いますこし近く云へば我々の行動が佛壽無極を體認して微小の善行でも日夜に行へば悉く莫二の大果を得ることが出来る。つまり衆生の性欲不同なるにより種々の教説があるのであるが、結局佛陀は萬善同歸と佛壽無極を説かれたものに外ならぬとのことである。

聖太子は法華經法師品の疏に於て、爾前經と、維摩經と、法華經の關係をかく記されておる。

譬へば人ありて渴乏して水を須ひんとして、彼高原に於て穿鑿して之を求むるに猶ほ乾ける土を見るとは。水は善量果に譬へ、高原は初教及び第二の波若經に譬へ、乾土は八十年の果に譬ふ。言ふこゝろは、前の二教の中には、善量果を求むれども得ずして、但八十年の果を得るなり、水尙遠しと知り功を施して已ますとは、維摩教を聞くに譬へ、轉た濕る土を見るとは、濕土は維摩教の七百阿含祇の果に譬ふ。言ふこ

ゝろは、水を得んが爲には、則ち濕土は少しく近し。内合せば、善量の果に於ては、七百阿含祇は少し近きなり。泥は今日の法華經に譬へ、其心決定して水必ず近しと知るとは、法華に至りて方に善量の果を知るなり。

此疏によつて知らるゝとをり、聖太子は維摩教をとられておるけれども、維摩教は水を求むるもの通過せねばならぬ濕土の度合であると自ら記されておる。水を求むるものは今一般の努力を要する、即ちほりさげ／＼て法華の善量果に到達せねば眞の佛法は飲めない。眞の水を知らずして佛教を云々すると乾土と濕土と泥土とごちや／＼になり、佛意を透徹することは困難になつてくる。世間におう／＼乾土も濕土も泥土も同等の佛教であると思ふものがあるが其れは法華の善量果を見たらうへで、体認したうへで、ふりかへて見ると乾土も濕土も一佛乘因としてくきてゐることがわかる、一佛果を知らずして乾

土を見れば三因三果の乾土であり濕土である。是れはわかつたやうでわかりがたい、佛法が死ぬか活るかの重要問題であるから靜座瞑目の要があらうと思ふ。

聖太子は釋迦牟尼佛と多寶如來の並座について左のとをり云はれておる。

多寶如來と釋迦佛と共に坐する所以は、滅度して既に坐するを以て、不生に而も生を現することを明さんと欲し。釋迦と多寶と並び坐するは、雙樹の滅は實の滅に非ざることを明さんと欲するなり。

多寶如來の過去に於て既に滅度し給ひし如來である、何故に全身のまゝ活きる如來としてこゝに現はれしか、是れ法華經に過去の常住と未來の常住を離はさねばならんゆへである、故に滅度の多寶如來も滅度し給ふたのでない、今釋迦牟尼佛も滅度せる多寶如來と並坐するは、雙樹の間に近く滅度を示めす

も決して滅度するものでないことを、先づしめさねば佛壽無極は説けぬ、又た普通の地上では八十歳の果は説けるが無始無終の佛果は空中へ昇らねば説けぬ、茲に於て五百由旬の寶塔が涌出した、又た聽者も空中へ昇らねばとても久遠實成の如來を知ることができない。

維摩致に維摩と文殊が電光相擊の大論議に於て維摩敗るか文殊屈するか圍繞の菩薩緊張の最高潮に至りたる時、忽然天女現れ天華をふらせたこと。又た華嚴經を見れば、釋尊菩薩樹下金剛坐上に開悟し給ひしや、菩提樹の技葉は寶珠を似て嚴飾し、師子座は大海の如く、光明は周遍して菩薩の大海藏を照すも、未だ法界唯一心の理を地上では説明できぬ、そこで釋尊は天上へ昇り天上の事を説き示すことになつておる。即ち法慧菩薩といふ菩薩が出て來て歌を歌ふ。それが濟むと夜摩天に行く。夜摩天では其處の王が自分の座を却き釋尊を招待する。やがて十

林といふ菩薩が出て來る。堅固林といふ菩薩が出て來る。それから如來林といふ林が出てきて唯心の歌をうたう。此れ林によつて無限を説かうとしたものである。此等が經典の構想を味讀することが寶塔品を見るうへに必要なからうか。

聖太子壽量品の六或を疏して曰く  
或は已身を説き或は他身を説くとは、言ふころは、或は他身を説きて已身と爲し、已身の説きて他身を爲す。此二句は教益を明す。或は已身を示し或は他身を示すとは、言ふころは、或は他身を示し、已身を爲し、己身を示して他身を爲す。此二句は形益を明す。或は已事を示し或は他事を示すとは、言ふころは、或は他事を示して已事を爲し、已事を示して他事を爲す、此二句は通じて萬事皆能く相返して爲に示すを明す。第二に能く不同なる所以を釋するにつき、疑を標して、能く是の如く相返する所以

は何ん。釋して曰く、理は本定れる性なし。如來は此理に明達するが故に、能く是の如く相返することを得るなりと、如來は如實に三界の相を見ずとは、三界は定まれる性あることなしと觀じ、生死の若しは退若しは出あることなしとは、理は本死として憂ふべきなく、生として喜ぶべきなく、亦退作の下愚なく、亦出作の聖人なきなり。亦在世及び滅度の者なしとは。亦在世の者の是れ凡なる、滅度の者の是れ聖なることなし。實に非ず虚に非ず如に非ず異に非ずとは、聖の義の是れ實にして取るべきなく、亦世事の是れ虚にして捨つべきなく、亦如の理として歎すべく、異の理として非すべきことなし。

三界の三界を見るが如くならずとは、言ふころは、三界を以て三界を見ざるなり。斯の如きの事如來は明に見て錯謬あることなしとは、云ふころは、此理に明達するが故に、能く是の

如く相反することを得るなり「諸の衆生の」あり以下は、第三に重ねて定めなきことを須ゆる所以を釋す。云ふころは、寧ろ理は實に爾れども、而も理の定なきが如くならんことを欲して爲に説く所以は、亦衆生の心性各異なりて欲樂不同なるに因るが故に然なり。

こゝにいたり序品にかへらねばならん、底品に列座の菩薩を稱賛して、以慈修身、善入佛慧、通達大智とある。理もと定性なし此理と一致したるもの即ち佛智なり、然るに衆生此理に迷ひ我慢偏執を事とし或は如とし或は異とし互に相争ひ、現實を輕んじ理想を尊び、或は現實を重んじ理想を輕んす共に非なり、世事のこと輕んずるものは理想のなきものである、理想あるものは世事を重んずるのである。聖太子は佛慧とは佛の眞智を云ひ大智とは佛の俗智なりと故に佛慧に相應せば俗智生じ俗智に相應せば慈の行動が生ずる、吾等から云へば慈を以て基本とせ

ば俗智生ず、俗智生ずが故に自行化他の種々の行動が生じてくる、自行化他の行動が自然に佛慧に向ふてゆくことになる。若し以て慈修身を基本とせざれば大智佛智の開発なく總ての行動が虚欺である。茲に於て聖太子は大智を以て心とし慈を以て身とせられたから聖太子は序品列座の一菩薩と見ることもできる。従つて佛壽無極の大果を得らるゝことにもなる。今此を佛陀と吾等に照應して法華經を見れば、釋尊は佛壽無極の極果より慈悲の因を吾等に法華經として賜はれたのである、然れば吾等は此因に至實とし佛壽無極に到達せねばならむ。去れど此因は以て慈修身である、若し以て慈修身なくとも極果を得んとするも法華經列座の一人たることを得ない。故に聖太子は萬善同歸佛壽無極の因果を實踐躬行せられたのである。是れ聖太子の法華經を撰擇し中心となされた次第かと思ふ。

聖太子の法華經觀は一經を因果二門に分ち、因門

て涅槃常住の由漸を聞くもの是なり。前後に相望するに二儀雙々明す。是れ此經の最第一なる所以なり。

茲を以て聖太子は萬善同歸の四字に爾前の諸經を攝し佛壽無極の四字に涅槃經を接し、佛敎の二大綱目悉く法華經に説き明されたものとの御解釋である。又た聖太子の法華經を撰び最後に製疏し給いたる御意は世間と出世間とを問はず眞實性に動く生活は悉く久遠佛果を得る因門なりとして、吾等の實際生活に深き哲學的、宗教的、道德的の根據を本經におかれたもので、政治、宗教、道德、藝術等の根本皆法華經にありとの御見解にて、自ら法華經に依りて政治、道德、社會政策等を実行し、其範を示せられたものである。

私はかゝることを考へながら法隆寺南大門をいで感慨無量、聖太子に何か一の啓示を得たやうな感がありました。

(了)

の歸趣は萬善同歸を旨とし。果門の要は佛壽長遠に歸されておる。即ち釋尊成道已後の衆經に説かれたる、三乘、五乘、世、出世の諸の善的行爲を開會して因門となし。果門は萬善の歸趣する所の無極の佛壽を明し、佛身常住を説けるものである。其の佛壽無極は大涅槃經に説かれたる、如來常住無有變易の説と壽量品と同致の者で、法華經は會前開後とて前説諸經を概括し、大涅槃經を開いたもので、即ち開近顯遠して無極の佛壽の果を示し、此の佛果は萬善同歸の因に應ずるものとの解である。

然らば聖太子は涅槃經中心か法華經中心かと云ふに、聖太子は法流の上なら涅槃に屬し、御精神は法華中心であつた。

義疏に 法華經の最第一たる所以は、會前と開後とに依る、會前とは爾前三乘の異路此經に來りて萬善同歸と云ふ是なり。開後とは佛壽無極を説き

## 婦人と社會事業

愛知縣社會課 入野契則

世界は先づ自分から始る。自分とそしてその繁累が集つて家族を爲す。そこから家の營みが生ずる。家集つて國を爲し、國集つて世界を爲すこと位は誰れでも知つて居ることである。自分と他人、この二つがお互ひに愛し合ひ、助けあつて大きな世界の營みを爲すことも亦知り過ぎた事である。俗に向三軒兩隣と云つて、まづ近くの人々から相愛し扶助し合つて幸福な社會を造つてゆくのである。

スタイン博士が「二十世紀は社會問題が中心になる」と云つたが、現代では、社會問題が最も中心になつて考へられ行はれつゝある。

一世紀の創生時代から、この二十世紀に至るまで、人間社會が總ての點で發展し、進化して二十世紀現



代の社會問題中心時代を作るやうになつたのは、歴史の上から見て、實に自然なことであるのがよく判る。

今日は科學萬能であり、發達し切つた科學が返つて人類生活を脅威するものゝやうに見える。そして貧富の差がいやが上にも加はつて怖ろしい人間同志の闘ひ、數へ切れなく發生する社會的悲劇が到然とそこに惹起つてゐるのである。

貧富の差を調和せねばならぬことが最も大きな、重なる今日の問題である。社會問題の論議される最大な目的はそこに在るのである。

貧乏なるが故に……こうなつた。貧乏なるが故に……こうせねばならなかつた。この貧乏なる故といふ一項は國家社會が最も力を盡して除去せねばならないことである。換言して見る、この「貧乏」は國家的疾患である。

今日、我邦各所で問題を惹起してゐる諸種の大小

でないのは判り切つた話である。その最も、方法は、今日心ある人が社會事業を行ふ事である。たゞ社會事業を行ふと云つても結果は國家が益し、國家が益すれば又到然個人が利する譯で、最後自分々々が、その社會事業の爲に幸福平和に生活してゆけるのである。

西洋には「適者生存、優勝劣敗」といふ言葉があるが、これは甚だしい非社會的、非個人的な見解である。われわれの心の中には東洋的精神がある。東洋人は「適者生存、優勝劣敗」など云はずして「憐保相扶、相互扶助」の精神を持つてゐる。この東洋的精神を以て即ち社會事業に可はつたならば國家社會の發展幸福は期せずして得らるのである。

然らば社會事業とは何かといふと、

- 一、救 貧
- 二、防 貧
- 三、兒童保護問題

の勞働者對資本家の懸憂等は、畢竟するに、この貧乏なるが故に、切實なる生活上の問題なるが故にからである。これ又、日本の國家的病氣であると思ふことが出来る。

これを治癒し、これを救ふことは最後、日本を救ふことになるのだし、又、今日の日本を救ふ一番近道であるのである。

露西亞の國民の貧乏が最後、革命の大動亂を起した。貧乏人と富豪と餘りに大なる懸隔を持つた生活制度、様式を破壊し、お互に生活に困らぬやうに仕合はふといふ共產主義の國家になつた。然し、その結果は決して、効果を齎らさず、今や再びロシア國民の大部分は生活に困つてゐる。主義の理想とするころはいふかも知れないが、然し、實際に行はれることではないのである。人間の心に萌す慾望には限りがない。この限りのない慾望を持つ人間に向つて共產主義の社會制度にするのは決して當を得た事

#### 四、教化矯風

の四つである。歐洲戰爭以前の社會事業は救貧運動だけで、貧乏になつた者を救ふので、貧乏になる者を救ふといふのではなかつた。これまで貧乏人を救ふのは自分の罪障消滅の意識だけでやられたのである。然しこれは徒らに乞食心を養成するに過ぎなくて、次の防貧といふ問題へ觸れて來たのである。防貧、これを充分に行へばひいては救貧の事業は無用になる。今日の社會事業の中心は即ちこの防貧であるのである。貯蓄心を養成したり、浪費をつし、ましたりするのである。

三の兒童保護問題、これは總ての人々を子供の時にしつかりいゝ素質精神にして置けば將來、いろいろな社會事業は又、必然無用になるといふ根本から生れた問題である。例へば嬰兒死亡率は英國が一割、伊太利が一割一分に比して日本は三割の死亡率がある。健康に於ても既にこれだけの損失があるわけ

ある。兒童の健康、思想は最も熱誠に心掛くべきこととて、その心掛はひいて母親に持つてもらわなくてはならないことであるといふので、更に母性教育といふ問題が生れて来る。英國に既に母の學校などと云ふのがあつて三ヶ月間、産婦人科、小兒科の實際醫學の教育やら情操教育法などが教へられてゐるのである。不良兒などもよく教育して優良兒にするのとなども兒童保護問題の一つである、又異常兒を通常兒に漸次教育してゆくのもこの問題の一つである。四の教化矯風に至つては、今日喧しく云はれてゐる公娼廢止だとか禁酒禁煙の運動だか、或は國民思想涵養の講演會などがその目的に依る社會事業である。これで、簡單ではあるが、社會事業の性質その内容について一通りお話ししたつもりであるが、婦人と社會事業といふ問題について更に一言したい。

婦人が社會事業に司る事は最適最良なことで、米國などでは社會事業運動家の七割は婦人に依つて占められてゐる。獨逸なども又同様であるが、日本は

婦人の社會事業に對しての學校もなく、又これに充分なる設備もない。が、然し、我邦の婦人の社會事業の歴史は最も古きは光明皇后より、檀林皇后、法均尼などの御事蹟などから考へて平安朝、鎌倉時代、徳川時代と昔から婦人の社會事業家であつたことは歴史に明かである。外國にも、かの有名なナイチンゲールや今尙米國で活躍してゐるジェン・アダムス夫人などの例もある。社會事業に婦人が最適最良であることは、こゝで今更喋々する要はなく譯り切つたことで米國では「社會事業に婦人の参加のないことは料理に味のないうやうなものだ」と云つてゐるのを見てわかる。

婦人には男性よりもつと深い同情がある。觀察力それから忍耐力がある。これを以て社會改造に當られたら効果を得ること間違ないと思ふ。

どうか、今日の婦人が慈愛の心を中心にし、連帯責任の意識で社會奉仕に當つて貰ひたいと望むこと自分の最も切なる希望であるのである。

— 妙教婦人會六月例會席上にて講演 —

# 記事

## 木更津の發會式講演會

千葉縣津町木更津郡成就寺では四月下旬既報の通り開堂供養も寛事なく終了致したので六月二十八日正結社發會式を舉行全日午後一時より發會式修法を講修して小竹山主は本會設立の趣旨として開會の辭に代へ、次に第二支部長徳令暎師は「日蓮教徒の使命」小林布教師は「立正の教風」草切教務部長は「矢の走るは弓の力」の題下に夫れ々得意の長廣舌を振ひて萬堂の聽衆を歡喜せしめ餘蘊などあつて盛會裡に散會

## 高岡教報

五月十二日信行會島山友次郎氏「法恩抄の概念」丹摩本勇師「伊東の流罪に就て」聽衆八十名高岡市の教界聴か光明

## 大阪教報

六月、日和井田宅にて「信仰の必要を論ず」石芥氏「實生活と信仰」上田師△二日堂開寺にて學生日蓮講會△五日蓮成寺にて「生死即涅槃」光好氏「事理の二法」和井田氏△十一日丸田宅にて本多親下より御本尊を授與され改宗(眞言宗より)式

を舉げ「佛性證讚に就て」享藤師△十二日堂開寺にて「生死即涅槃」和井田氏「日蓮主義の梗概」京藤師「佛敎の梗概」上田師△十三日平山宅にて「法華經の大要」享藤師△十四日光好宅にて「懺悔に就て」和井田氏「起願竟に就て」上田師△十六日日蓮成寺にて立正結社婦人會「釋尊涅槃の遺訓」本多親下△十八日晝大阪工廠にて「修養の三方面」本多親下夜大紙俱樂部にて「法華經と日蓮聖人」本多親下△二十二日堂開寺にて「行學の二道」石井信一氏「日蓮主義の特長」石井得雄氏「日蓮主義の梗概」享藤師「懺悔に就て」和井田氏「余が入信に就て」本木氏△二十四日徳宅にて「日蓮主義に就て」石井氏「法華經の二方教義」享藤師△二十五日木津妙樂寺にて深信會「信心の徳と力」享藤師何れも盛會。

**金澤通信** △説教會釜屋本成寺にて六月八日例會「釋尊の御名に於て」能仁一十師△常樂會本覺寺に於て十五日例會「信仰感話」紫野野師「日經上人を偲びて」杉田常政師「物を見つめて」能仁一十師△信仰講座本長寺に於て二十二日例會「信仰に就て」杉田常政師「娛樂と信仰」能仁一十師△天晴會本長寺二十日例會「宗教法案と信仰的觀察」能仁一十

師△説教會本行寺に於て二十八日例會「感謝の生活」能仁一十師△家庭講話本多町河合氏宅にて廿九日「日蓮上人の理想」能仁一十師

**日蓮主義夏期講習會**

- 一會場千葉縣安部館山町水蓮寺
- 一會期八月四五六日の三日開午後五時より
- 一講「理想の文化と佛敎」天僧正本多日蓮
- 一講「佛敎の大系と立正大師」管長井村日成
- 一聽講料金壹圓也 但支宗僧員は聽講料不要
- 一僧俗一般來會者は宿泊實費
- 一申込及照會は會場本蓮寺小林日蓮又は若津郡木友津町成就寺小竹俊雄方へ

**名古屋自慶會** 今會六月は例月の如く本多親下を講師として十九日豊田鐵機、押切工場、行學會の三布教會を始めとして廿日豊田本社及び、教化會館公開講演會、廿一日敷下工場、三菱内燃機、濠定商店の三會合、廿二日服部商店、日本車輛、山岸製材等何れも聖訓を垂れ佛光を示現した。

**妙教婦人會** 六月例會は、日夜教化會館で開會。清水一乘師の法話の後、愛知縣衛生課長山方喜太郎氏の「夏期の食物に就いて」といふ有益な衛生講話があり多大の感銘を與へて盛會裡に十時散會

社寺建築及臺灣檜材の安價提供  
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候  
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候  
(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不)充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の特大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理髮松木
- 六、木高輝色

統一價定	
一冊	金貳拾錢
半冊	金壹貳拾錢
一ヶ月	金貳圓貳拾錢
一年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
送料五厘	送料五厘
送料共	送料共
送料共	送料共

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金五圓
四分一頁	金九圓
一頁	金五圓
金	金
五	九
圓	圓
圓	圓
事	之
金	前

大正十五年 七月三十日印刷納本(第三百七十七號)  
大正十五年 八月一日發行

不許複製

編輯所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
編輯人 國友日斌  
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
印刷所 三益社

發行所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
統一發行所 總發東京五一〇七一番

編輯所 名古屋市中區田代町字城山七十七番地  
統一編輯局 電話東京五一〇八一七番  
電話名古屋一〇八一七番

目 次

聖訓摘要	本多日生
法華修業の安心	本多日生
社會問題と佛教	石田三次郎 醫學博士 講師
讀書錄	不明
各地通信報導	編輯局

第三十三號 九月九日

